【中町図書館】
令和２年度平和啓発事業
「未来を担うお子さんたちへ」
～戦争を体験した渡辺さんへインタビュー～

令和2年7月19日（木）～8月20日（木）

新宿区立中町図書館

中町図書館では、地元にお住いの渡辺芳子さんに、お話を伺いました。渡辺さんはご実家の牛込区の圓福寺で育ち、愛日小学校（当時の愛日国民学校）で学童疎開[1]を体験されました。現在も地元にお住まいになり、地域のためにボランティア活動を続けていらっしゃいます。渡辺さんが体験されたこと、感じていらっしゃることを伺いました。（令和2年7月3日実施）

※プロフィール：渡辺芳子さん （横寺町在住）
牛込区生まれ。新宿区婦人団体協議会会長、グループひまわり代表。高齢者への給食サービスなどのボランティア活動に従事。保護司（保護司法に基づき，法務大臣から委嘱を受けた非常勤の国家公務員。実質的には民間のボランティアである。）としても 27 年間従事。大学では、英文学を学んだ。

Q：お越しいただいてありがとうございます。本日は、戦争を体験した渡辺さんに、今の子どもたちに向けて伝えたいことを伺いたいと思っております。よろしくお願いいたします。

渡辺：こちらこそよろしくお願いいたします。

群馬県への学童疎開

Q：ではまず、渡辺さんが体験なさった太平洋戦争当時のことなど覚えていることや印象に残ったことなど教えてください。

渡辺：私が生まれたのは 1934 年、昭和 9 年になります。小学校に上がったのが昭和 16 年。その年の 12 月 8 日に太平洋戦争が始まりました。1 年生の時です。その時から小学校ではなくて、愛日国民学校という名称に変わりました。例えばですけれども、「歴史」や「地理」ではなく、「くにのあゆみ」という本をいただきました。
昭和 19 年の 4 年生の時に戦争がとても激しくなって、学童疎開が始まりました。愛日（愛日小学校からも）も方々に参りましたけれども、私は 4 年生の時に栃木県赤津村の龍興寺というお寺に学童疎開をいたしました。3 年生から 6 年生まで男女合わせて 30 人くらいだったと思いますが、男性の先生がおひとりと、近所のお姉さんがおひとりお世話係となって付き、お寺に参りました。そこでの生活は、大広間で食事をして、勉強して、またそこにお布団を敷いて寝る。全て大広間を使って生活いたしました。
お寺のご住職さんと奥さんは、とても優しい方でした。ご近所の方もずいぶんお手伝いしてくださったようです。
毎朝、和尚さんの読経から始まりました。今でも覚えています。
それから、近くの赤津村国民学校に編入いたしました。担任の先生がとても優しくて、私は旧姓が長（おさ）芳子なので、（同じ「よしこ」ということで）石川よしこさんとおっしゃるかたのお隣に席を取ってくださいました。とても優しかったですね。（学校に）行くといつも先生が待ってくださって、手を温めてくださったり、私の話を聞いてくださいました。ですので、学校生活はすごく楽しかったですね。

---

[1] 学童疎開：太平洋戦争の末期に、戦争の災禍を避けるため大都市の国民学校児童を、農山村地域に集団的または個人的に移動させたこと。（「広辞苑第 7 版」岩波書店より）

ただ自分の下着とか、ハンカチとか、そういうものは自分で川に行って洗わなくてはいけなくて。お友達がよく手伝ってくださいました。

でも、なんといっても両親とか兄弟から離れて暮らすというのは、4 年生の子どもにとって、想像外でした。「帰りたい」とか「さびしい」ということは手紙に書けませんので、私は「北風に声をかけてねお母さん　疎開している人を忘るな」という短歌にしたためて送りました。すぐに父が迎えに来てくれました。そのまま、家族が待っている疎開先の群馬県に参りました。

Q：お手紙は、そのままでは出せなかったのですね。

渡辺：先生がご覧になって。ダメなのですよね。「帰りたい」というようなことは書けない。

ご飯が不味いとか、そういうことよりは、やはり家族に会いたい、それが第一でしたね。でもそれを癒してくれたのは、ご一緒に疎開したお仲間の優しさですね。

ある日、母が会いに来てくれて、そこで先生が、母を帰りに送って行っていいよと言ってくださいました。駅からお寺まで 10Km の道のりを送っていったときに、母が「帰りたい？」と聞いてくれました。「ううん、大丈夫」と答えて、やはり頑張ってしまうのですよね。帰りたいとは言えませんでした。

下着に名前を縫い付けてポケットのようにしているのですが、そこに母がたたんだお札を入れてくれたのです。「何かあったときに使いなさい」と。それを覚えています。

Q：一泊だけのお泊り会なら楽しいかもしれませんけど、毎日だと夜中泣いてしまうお友達もいらっしゃったのではないですか。

渡辺：全然環境が違って、誰も知らない場所ですね。いくら先生が良くて、お友達がいても、生活環境が全然違いますものね。

Q：疎開はいつまでだよとか、いつ帰るよという目安はあったのですか。

渡辺：それはありませんでした。たぶん皆さんは終戦までいらしたと思います。次の年の 8 月が終戦でした。私が疎開したのは昭和 19 年 8 月で、1 年ぐらいで終戦になったと思います。

<u>終戦を迎えて</u>

渡辺：私の場合、3 か月で学童疎開を終了して、家族がいた縁故疎開の方に参りまして、そこで次の年の 8 月 15 日に、終戦ですね。終戦の玉音放送（天皇陛下の放送）がありますって周知されて、ラジオのあるお宅に集まっていました。私は田んぼのあぜ道で弟と一緒に歩いていて、「戦争が終わったわよ」ということを聞きました。いまでもその光景は浮かんできますね。まずほっとしましたね。そのあと「これからどうなるのかな」と思いました。
どこかにまとめられて、「ここにいなさい」と言われるとか、自由になれるのか。
ほっとしたという気持ちと不安な気持ちが交錯していました。

意外と映像で覚えているのですよ。自分のそういう記憶、というか記録が。

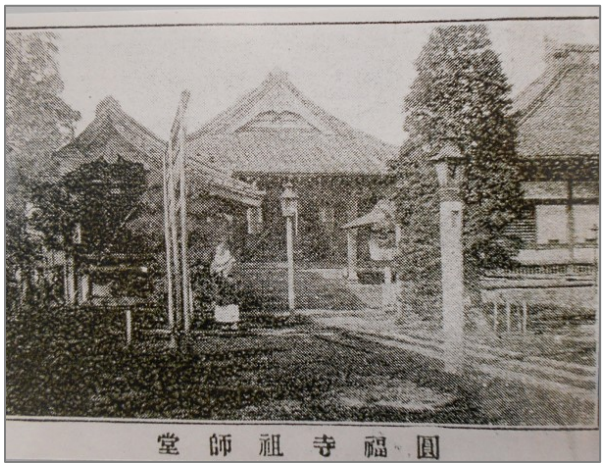
終戦が昭和 20 年ですね。その年の秋に東京に戻ってきました。私は家（ご実家のお寺）のもうひとつの別院が、杉並にあったので、そちらに参りました。

アメリカより「ララ物資[2]」というのが届いたのです。そこにはビスケットとか乾燥りんご、外国の方がお召しになった洋服、ワンピースとかをいただきました。
みなさんで分けたと思うのですけれど。ビスケットの方と乾燥リンゴの方というふうに。やはりビスケットの方がよかったと覚えています。
もしも戦争が終わらなくて、そのまま突き進んでいたら、日本はどうなっていたかわかりませんよね。

東京での空襲

Q:その当時(戦時中)の生活で怖いなと思ったことはありますか？

渡辺:私の住んでいた群馬県(家族と疎開した場所)には中島飛行場というのが近く、利根川渡ってすぐのところにあったのですけれど、飛行機が攻めてくるので、学校に行くとき、飛行機が通るたびにあぜ道にしゃがんでやりすごしていました。ただ、そこら辺にやたらに爆弾とか落としていたわけではないのですけれども。たぶんその飛行場を目掛けていたのでしょう。
そうそう、ここは牛込区と昔言いましたでしょう。新宿区ではなくて。
牛込の地区が戦火にあったのは、昭和 20 年の 4 月 13 日と 5 月 25 日でした。4 月 13 日の時は、私は群馬県に疎開していたのですけれど、5 月 25 日の時はたまたま、学校でちょっと目が悪いと言われ、母が今の逓信病院に連れてきてくれました。そして田舎に帰る前に空襲にあいました。
私の家は大谷石の塀があって、そこにみなさんが煙をよけて下にずらっといました。そこへ父が鉄兜で水を持ってきてくれて、目を洗いました。今思うとぞっとすることですけれども、私も意外と戦火をくぐってきたのですね。



明治時代のご実家(圓福寺)の建物、(渡辺芳子さん提供)

Q:この時は焼夷弾を落とされたのですか。

渡辺:そうです。焼夷弾を落とされました。ものすごい爆発力がなくても、ぽんぽんと焼けてしまうのです。みなさんが自分のお荷物を持って逃げているのですが、そこに火がついて、それを道路に置いていくのです。それがすごく

[2] ララ物資（ララぶっし）とは、アジア救援連盟から、アジアの生活困窮者に送られた物資。(「日本国語大辞典」第２版　小学館発行　より)

熱くて。家の柱、今のような鉄筋とかモルタルではないので、柱も焼け落ちていました。
　このあたりの中町も何もなくなって、ずっと向こうまで見えました。
2、3 日前にも、姉がいろんなことを覚えているので、話をしまして。塀のところにいるときに一緒にいたのですが、顔をちょっと 10cm 下にしただけでずいぶん息が楽になったと覚えておりました。

Q：熱気で息が苦しかったということですね。

渡辺：そうなのですよ。でも顔を 10cm 下にしただけで、楽になったのです。何かの時には 10cm 下を向くといいわよ。10cm くらいのちょっとの差でも全然違うのですね。

<u>ボランティア活動について</u>

Q：戦後の 1 年間の混乱の時期、戦災孤児の問題がありましたよね。

渡辺：私が 40 年くらいやっているボランティア、新宿区の婦人団体協議会、女性団体なのですけれど、創立 72 周年になります。この会は、まず戦後間もない新宿のガード下の孤児たちにミルクを差し上げる活動から始まったと伺っています。それを推奨なさったのが、アメリカ人の将校のスミスさんという方でした。救いの手を伸べた。以前、記念誌（婦人団体協議会発行）に書いたのですけれど。

Q：現在、ボランティアの活動を継続されていますね。

渡辺：私は今、（先の婦人団体で）40年間、ボランティアをさせていただいておりますけれども、その原点は、大学 4 年生の時に、先生に頼まれて、「一日里親」というものをしました。小学校のお子さんを預かって、それで遊園地とかデパートへ行きました。その時に、家族がたくさんいるところにお子さんを連れて行ってしまったという事が。自分だけの考えでしたけれども。その時のことが心に残っております。相手の気持ちになってあげられなかったという。そんなことが原点かなと思っております。もともとお預かりして面倒みるということが、嫌いではなかったのかなと思います。それが今のお節介に繋がっているのですね。
それも、独りよがりになってはいけないですね。
私は 27 年間、保護司をさせていただきましたが、その時に、相手の方に対して、「きちんとした生活をしてくださいね」とか、「勉強してね」とか、そのようなことばかり言っていたのです。けっこうつっぱった少年だったのですが、ある日、法務省の専門官の方が面接をした時に、その先生が「よく頑張ったね」とおっしゃっいました。すると、その少年の目から涙がこぼれ落ちたのです。やはりいいところを見つけて褒めてあげること、それだなと思いましたね。

Q：寄り添ってあげるということですか。

渡辺：そうです。私は叱咤激励ばかりしていたのです。自分の子どもでもそうでしょう。
　「よくできたね」とか、「素晴らしい」とか褒めないと。それがすごく私には残っています。

Q：活動を聞いていますと、手を差し伸べるということが自然にできていらっしゃると思います。

渡辺：なんでも経験したことは無駄にはならないと思います。どこか心に残っていて、こうしたいとかこう出来たらいいとか思いますよね。それから、その時頂いた優しさとか、ありがたさとか。
手を差し伸べていただいた、ちょっとしたことが嬉しかったですね。
一人じゃないという気持ちがしますよね。

Q：今回はコロナ禍の騒動で、まだ収まっておりませんが、もしかしたら今までの生活って幸せだったのだなと思いました。不自由な事が起きて、初めて今までの幸せがわかります。今まさに、子どもたちはそんな中にいるのでしょうね。戦争のことだけではなく、ご経験の中で、地元に密着したいろいろな活動をしてこられましたね。

渡辺：やはりこの地域が好きなのでしょうね。伝統もあるし、賑わいがあるのに、静かでしょう。人が優しいですよね。ちょっとお節介なところもありますけれど、優しいですよね。
ありがたいですよね。おかげさまで。普通にできる範囲ですけれども。お仲間が出来たり、考えることが出来たり。

子どもたちに伝えたいこと「選択肢があることは素晴らしい」

Q：そんなご活動の中で、また戦争当時、経験なさったことを通して、今の子どもたちにどんなことを伝えたいですか。
渡辺：やはり家族がいて、お友達がいて、地域で過ごせるということ。これは素晴らしいことだと言えます。普通のことのようですけれど。
　そして、出来るだけ小さいときにいろいろな体験をしていただくといいかなと思います。例えば、読書もそのひとつです。また、いい音楽を聴くとか、自然に触れるとか。そうすると心の栄養がもらえると思います。物事を考えるときに幅が出来て、考え方に優しさとか寛容な気持ち、それが反映されるのではないかって思っております。
　今は戦争中と違って、「これになりたい」とか「この学校に行きたい」とか選択肢がたくさんあります。それを自分の気持ちで選択することが出来ます。それってとても自由でありがたいことですが、やはりそこには責任が生まれます。しっかり考えて責任を持った行動というのも必要になってくると感じております。
　そして、今、お友達をたくさん作ってほしいと思います。生涯を通して、地域のかたでも、学校のかたでもお友達っていいですよね。
　相手を思いやって、ちょっと人のお役に立てることをしていただいたらいいかなと。そんなボランティアとかおおげさに振りかざさなくても、困っている人がいたらちょっと助けてあげるとか。
　可能性がいっぱいあるって素晴らしいことですよね。
生きていれば、いろんなことが出来ますからね。
今も世界中に戦争があります。でも、私たちは生き延びられる。人には生きる力があります。あきらめないことが大切です。

Q：「生きのびる」とか「諦めない気持ち」って、そういうことをすごく切実に考えるということが現代の私たちや子どもたちにはないと思います。「生きのびる」っていう感覚が。

渡辺：私の家にいたお弟子さんも、若くして戦争に行かれて亡くなりました。お国のために戦争に行かれた方々と

実際に接していました。本心はわかりませんが、自分が行きたくなくても赤紙[3]が来たら逃げることは出来ませんから。
選ぶ自由があることは素晴らしいことです。ですが、自由ってなんでも自由にしていいというわけではないのです。そこにちょっと責任を持って。本を読んだり、いろんな体験をしていると、これは「言っていいのか」と考えられる子どもさんに育ちますよね。
だから、どんな体験も何にも無駄なものってないような気がいたします。
多様性を受け入れられる人になっていただけたら嬉しいと思います。

明るく前向きな渡辺さん

Q:渡辺さんの話をお聞きしまして、素晴らしいと思ったのは、明るい前向きなお気持ちです。

渡辺:「生きるために食べる」とおっしゃったお友達がいたのですが、その時、私は「食べるために生きる」と。
「食べたい」とか、「お友達と会いたい」とか「何かを見たい」とか。そのために生きている、そういうのが大事だと思いませんか。もったいないじゃないですか。ちょっと発想を変えるだけで。
私は生涯学習だと思っています。

Q:ボランティア活動を 40 年もやってこられました。継続されているということは並大抵ではない特別な事かなと思います。

渡辺:先輩がいらっしゃって、お仲間がいて、それで出来ることです。一人ぼっちにしない、ならない。
こうやってお会いできるということはうれしい事ですね。

Q:ありがとうございました。これからもどうぞご健康で、ご活躍ください。

【謝辞】
明るく穏やかに語ってくださった渡辺さん。ボランティア活動は地道で忍耐強い活動です。小学校時代に経験した学童疎開の経験を経て、自然と周りの人に思いを寄せてこられたように感じました。貴重なお話をいただきありがとうございました。

中町図書館館長

---

[3] 赤紙：軍の召集令状の俗称（「広辞苑第 7 版」岩波書店より）